

# 誌上 ケース検討会

50

## 介護観の異なる家族を どう調整するか



スーパーヴァイザー・奥川幸子氏を招いて開かれた事例検討会の模様を紹介します。(検討会及び事例の内容は、誌面の都合及びプライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました)

### ●事例提出者

Jさん (在宅介護支援センター・看護師)

### ●提出理由

母親と二世帯住宅で生活を送っている長男夫婦と、同市内に居住している長女の介護方針が異なることから、姉弟の溝が深まり、最終的に修復が難しくなってしまった事例。援助職者自身が姉と弟の間で振り回され、クライアントである母親の力になれなかったのではないかと反省している。経過を振り返りながら、介護観の異なる家族への援助のあり方について意見をうかがい、今後の仕事に生かしていきたい。

### ●事例の概要

クライアント：Y氏、82歳、女性

既往歴：パーキンソン病、骨粗鬆症、痴呆症

ADL：要介護3

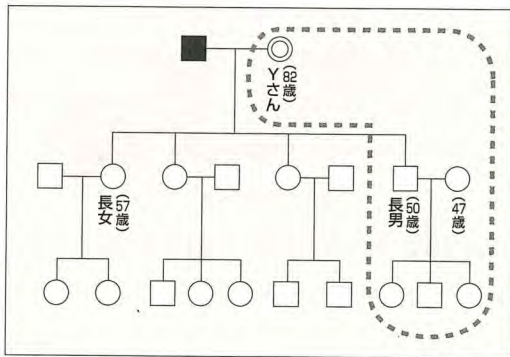
利用しているサービス：デイケア、訪問介護、福祉用具貸与

住居：亡夫が住職を務めていた寺に隣接する二世帯住宅 (現在は同居の長男が住職を務める)

家族構成：

長女：肌の色が白く、上品で年齢(57歳)より若く見える。2人の子どもは独立し、現在は夫(58歳)と二人暮らし。

長男：4姉弟の末子。体格がよく、時々威嚇



的な話し方をする。50歳。

長男の妻：細身だがバイタリティがあり、寺に隣接する保育園の園長と住職の妻、3人の子どもの母の3役をこなしている。47歳。

次女と三女はいずれも遠方に嫁いでおり、介護にかかわることはできない。

### ●生活歴

東京にて3人姉妹の長女として出生。女学校卒業と同時に父親の転勤に伴い、関西に移住。金融機関に数年勤務の後、地元で代々続く寺に嫁ぎ、4児をもうける。結婚後の家庭生活は、「仏に仕える者は生活感を出すものではない」との夫の方針から、家事全般や子どもの世話は基本的に家政婦に任せていた。夫は家族のなかで絶対的な存在で、すべてを取り仕切っていた。

平成5年、夫が死去。2年後、パーキンソン病を発症するが、振戦などの症状もなく、ADLはおおむね自立していた。平成9年頃から、物忘れなどの痴呆症状が目立つようになる。

12年10月、長男一家と同居している自宅で歩

行中に転倒し、大腿骨頸部骨折。入院して手術を受けるが、その後も何度か転倒を繰り返す。13年9月の退院時には、介護が必要な状態となった。これ以降、訪問介護（家事、入浴介助等）、デイケア（リハビリ等）などを利用するようになるが、この頃から介護のあり方をめぐって長女と長男の間が険悪になる。

### ●援助経過

**平成13年9月5日** 退院に伴い、介護保険を利用することとなり、かかわり始める。リハビリ目的でデイケア、訪問介護（家事援助）を利用。デイケアでのリハビリにより監視歩行レベルまでADLがアップする。

**14年1月18日** 自宅で歩行中転倒し、大腿骨頸部骨折にて入院。

**2月20日** 病院で面会をすると、「早く家に帰りたい」と涙を流して言われる。担当のPTによると、今回はリハビリ意欲がまったくなく、効果が上がらないとのこと。

**3月10日** 長女より電話。「母が早く退院したがついている。私の家に引き取って面倒を看たい。ついては夜は家政婦さんを雇おうと思うが、いくらぐらいかかるか調べてほしい」とのこと。

同日午後、長男の妻から電話。「今日、病院で主治医の先生と話をした際、退院の話がでた。姉は自分の家に連れて帰るつもりのようなのだが、今まで通り自宅に戻したいと思う」と興奮した

声で話す。

**3月20日** 長男の妻から電話。「30日に退院となったので、退院後のことを相談したい」

**3月28日** サービス担当者会議を開催。出席者は、長男、長男の妻、訪問介護事業所、病院のPT、通所リハビリ事業所、ケアマネジャー。長男より「姉が出てきて話がややこしくなっているが、母を最後まで看るのは自分である。施設に入れるつもりはない。できる限りのことは自分たちでするつもりだが、夫婦ともに多忙なので、手が回らない部分はサービスを使いたい」との話がある。

**3月29日** 長女より電話。かなり興奮している。「退院後のサービス計画を見せてもらったが、1カ月に20万円も自己負担があるなんておかしい。介護は家族がするもの。自分は夫の母を10年間介護した。あなたからも長男の妻に、もう少し母の面倒を見るように言ってください」。それに対し、ケアマネジャーからは、入院前より身体状況が低下していること、長男夫妻の話では、保育園と寺の仕事が多忙なので、ヘルパー派遣により最低限の世話を確保したいとのことだった、次回の計画作成時には同席してほしい旨を伝える。

**3月30日** 退院。自宅を訪ねると、Yさんは嬉しそうにニコニコしている。

**4月22日** 5月のサービス計画の確認のため、長男夫妻と長女、ケアマネジャーの4人で話し合いをもつ。開口一番、長男が「みんなに一言いっておく。この家の主人は私だ。私がダメと言ったことは、誰がなんと言おうとダメなん

だ。私の知らないところで話を進めるんじゃない」と大声で怒鳴る。姉に対しても「お前はウチのことに口を出すな」と威嚇するように言う。その後、昔の話を持ち出し、ネチネチと嫌みを言い、姉と弟で口論となる。喧嘩の内容が子どもじみていると感じる。

**4月23日** 長女より電話。「昨日はすみません。あんな弟で情けない。介護は家族がするもので、嫁がしなくてはいけないんです。あの嫁がそんなに忙しいわけがないんです」と同じ内容を繰り返す。

**5月25日** 6月のサービス計画を持って自宅へ訪問、長男夫妻と話し合いをもつ。長男「姉の言うことは一切無視してほしい」。長男の妻「姉は私にもっと義母の世話をしてほしいようですが、寺の仕事と保育園の仕事があるので、私には今の状態が精一杯なんです。義母もヘルパーさんやデイケアを喜んで利用しており、何の問題もないと思うのですが」。いつ訪問しても長男の妻は忙しく立ち働いており、「これ以上はできない」と言う気持ちは理解できる。

**5月29日** 長女より電話。「時々母の様子を見に行っているが、やはり弟夫婦は母の世話をしていない。母がかわいそうで。介護は家族がするものなのに……。できることなら、家に引き取って面倒をみたい」

**6月3日** デイケア利用中のYさんと話す。自宅での生活はどうかと尋ねると、ヘルパーさんが好物を上手につくってくれるとニコニコして話す。もし、長女が「自分の家においで」と言ったらどうするかと尋ねると、少し考えてから、



「やっぱり自宅がいい」とのこと。そして、「A子さん（長男の妻）に何か役割をもたせてほしい」とハッキリ言われる。

**6月14日** 長女より電話。Yさんが腰を痛がるので入院させたいとのこと。長男夫婦はどう言っているのかと問うと、「なんで母が入院するのに弟が関係あるんですか。弟たちは何もしません。母がかわいそうです」と繰り返す。

**6月15日** 長女がYさんを連れて外来受診。圧迫骨折との診断があり、医師から入院を勧められると、Yさんも渋々納得し、入院となる。長男へ電話で事情を説明すると、「〇〇さん（長女の名字）が帰った頃に私たちが着替えを持って行きます。もう、〇〇さんとは姉弟でも何でもありませんから」と言う。二人の溝がますます深まっていると感じる。

**7月25日** 長女より電話。「母が退院したがっている。私の家に連れて帰りたい」とのこと。長男夫婦も同意しているのか尋ねると、「あの二人には任せておけません」と興奮して話す。

**7月26日** 長男の妻より電話。「姉がどうしても自分の家に連れて帰ると言い張って困っている。夫と姉は姉弟なので、今は仲が悪くても、縁は切れない。私は他人なので、一度関係が悪くなると、修復は難しいと思う。二人の間に挟

まれて大変です」

その後、姉弟間で話し合いがもたれたが、喧嘩別れとなり、Yさんは長女宅に退院することとなった。

**7月30日** 長女宅へ訪問。Yさんは応接間のソファに座っている。「どうして私はここにいるのかね。迎えが来なかったのかね」と話す。長女は「とりあえず1カ月ほど家において様子を見ます。ただ、私は腰が悪いので、朝、昼、夕、入眠前と入浴介助にヘルパーさんをお願いしたい。それと、現在パン教室に通っているのと、ピアノをまた始めたいと思っているので、その時にもヘルパーさんをお願いします」との希望がある。

**8月18日** 訪問介護事業所から電話。Yさんが「家に帰りたい」と何度も言う。このところ急激に痴呆症状が進んでいるように感じる。また、仙骨部に褥瘡ができかかっているとのこと。長女宅を訪問すると、長女は疲れ切った表情で、手に湿布を貼っている。

**8月28日** 長女宅を訪問。Yさんは車いすに座っている。長女より「私はとんでもないことをしてしまったのかもしれない。私がいないと母がおかしなことばかり言う。主人も最初は『ずっといてもらっていい』と言っていたが、最近は母の存在を疎ましく思っているようだ。私がどれだけ尽くしても、母の気持ちはお寺にある。向こうに帰ってもらったほうが、母のためにもなると思う」との話がある。Yさんに気持ちを確かめると、「帰りたい」との言葉が返ってくる。

**9月2日** 長男の妻が迎えに来て、Yさんを自宅に連れて帰る。姉弟の仲がおかしくなったのはいつ頃からなのか聞くと、「義父が亡くなった後、主人が庭に義父の好きだったひまわりを植えたのですが、義母と義姉が抜いてしまったの

です。それからおかしくなりました」との話がある。

以後、身体状態は以前に比べ落ちたものの、自宅でサービスを利用しながら落ち着いた生活を送っている。

## ケース検討会

**奥川** Jさんのなかで一番引っかかっているのは、どんな点ですか？

**Jさん** 私がかかわっている間に、みるみる長男と長女の関係が悪くなっていってしまいました。間に入ってなんとかうまくいかせたいと思ったのですが、結局何もできませんでした。結果的にクライアントであるYさんに負担をかけてしまったのではないかという思いがあります。どの時点で、どんなことをすればよかったのかわからないでいます。

**奥川** わかりました。問題意識は明確ですね。援助職者として、どの時点で何をすればよかったのか。今日はこの点を考えていきましょう。では、まずはこのご家族がどんな状況にあったのか、より詳しくアセスメントするための情報をJさんから引き出してみてください。

### クライアントの役割を探る

**発言** 生活歴のなかで、「夫の方針により、家事全般や子どもの世話は家政婦任せであった」ということですが、具体的にはどのような暮らしぶりだったのでしょうか。

**Jさん** 例えば、ものを食べているところを檀

家には見せたくないとお主人は考えていたようで、子どもたちは自宅では食事をせず、近所の旅館ですませることがほとんどだったようです。ですから、Yさんは家事はあまりしたことがないと思います。

**発言** では、Yさんは家の中ではどんな役割を担っていたのでしょうか。

**Jさん** 法事の時に檀家の方に挨拶をしたりといった、お寺の大黒さんとして表に出る社会的な役割をされていたようです。

**奥川** 経理などには携わっていましたか？

**Jさん** いえ、Yさんはお金の面にはノータッチで、ご主人が管理していました。

**発言** Yさん夫婦のなれそめはご存知ですか？

**Jさん** Yさんが金融機関で窓口業務をしている時に、ご主人に見初められたそうです。

**発言** 金融機関に勤めていたのなら、お金の扱いは慣れているような気がするのですが――。

**Jさん** 実は、Yさんはとてもお綺麗な方で、若い頃はミスコンテストで優勝したこともあるそうです。おそらくご主人としては、生活の実質的な側面よりも、社交的な部分を務めてもらいたいと思っていたのではないかと思います。

## 長男のポジションを読む

**発言** 長男は時々威嚇的な発言をするということですが、父親の絶対君主ぶりを受け継いでいるのでしょうか。

**Jさん** いえ、そうではないと思います。たしかに「俺が家長だ」と怒鳴る時などは迫力がありますが、本来は気の弱い方だと思います。Yさんが倒れて救急車を呼ばなければいけなくなった時に、長男はオロオロするばかりで、結局お嫁さんが救急車を呼んだというエピソードもあります。本人は威勢のいいことを言っていますが、実際に家のことを取り仕切っているのはお嫁さんだと思います。父親が亡くなった時にかなりの遺産が残ったそうですが、長男は証券会社の営業マンに勧められるままに株を買って、結局ほとんど手元に残らなかったようです。ボンボン育ちというか、世間にもまれていない感じを受けます。

**発言** Yさんの介護をめぐり、長男と長女はかなりのいがみあっていますが、もともと二人はどんな関係なのですか？

**Jさん** わりと年齢が離れていることもあり、小さい頃から長女は長男の養育係というか、何かと目が離せない存在だったようです。

**発言** 弟としては、お姉さんに頭が上がらない感じですか？

**Jさん** そうですね、今はそういう感じではないですが……。

**奥川** 父親のことをいつでも偲べるようにと長男が植えたひまわりを母親と姉が抜いてしまった後、長男の様子がおかしくなったとお嫁さん



が言っていますが、花を抜かれたことに対して、長男はどんな反応をしたか聞いていますか？

**Jさん** その後、1年くらい二人と口をきかなかったそうです。

**奥川** 直接怒りをぶつけたり、植え直したりせずに？

**Jさん** はい。ただ口をきかなくなったといううです。

**奥川** たとえば、そういう反応からも、弟がこの家のなかで置かれていた立場や家族の関係性が読み取れると思いませんか。

**Jさん** なるほど、たしかに——。父親と姉3人の下でずっと抑圧されていたのかもしれませんが。それだけに、今は「家長」であることに強いこだわりがあると考え、あの威嚇するような激昂ぶりも納得がいきます。

## 長女の人物像を共有する

**発言** 長女は母親を引き取る気持ちが強かったようですが、「とりあえず1カ月」とか「ピアノを始める」「パン教室に行く」と言ったりしているところに違和感を感じたのですが。

**Jさん** そうなんです。長女は介護に対する認識がかなり甘かったと思います。ご自宅にしても、ファッション雑誌が何かに出てくるようなお宅で、まるで生活感がありませんでした。

**発言** でも、長女はご主人のお母さんを10年以上介護していたんですよ。

**Jさん** 私もその点を不思議に思ったのですが、あとでよくよく聞いてみると、排泄・入浴・食事などはかなり自立していたようで、ほとんど介護らしい介護はしていなかったんです。

**発言** Yさんと長女の関係は濃いのですか？

**Jさん** そうですね、ある面では普通以上というか、数年前に飼い犬が病気で死んだ時は、ショックで落ち込んでしまって、しばらく実家に身を寄せていたそうです。

**奥川** 50歳を過ぎて、夫も子どももいる女性ですか？

**Jさん** はい。

**奥川** なるほど。そういう長女が2度目の退院の時は、なかば強引にYさんを引き取ることになりましたね。この時、Jさんはそのことをどうとらえていましたか？

**Jさん** この方は、実際に自分の身体で体験しないと現実を認識できないのだろう、おそらく1カ月ぐらいしかもたないだろうと予想していました。その時に備えて、長男の妻と連絡を取りながら準備をしておこうと考えました。

**奥川** 専門職としてきちんと予測ができていたわけですね。ただ、Jさんとしては、そういう迂回路をとらずにすんだのではないかと考えているのですね。

**Jさん** はい、療養の場所が変わるのは、ご本人にとってはかなりの負担ですから……。

## 媒介者の役割をどう発揮するか

**奥川** では、ここまでの情報を踏まえて、今日の課題について考えてみましょう。長女に実際に介護の大変さを体験してもらわずとも、最初から長男の家——Yさんにとっては、長年暮らしてきた自分の家でもあります——に帰ってもらえるようにするには、援助職者はどうかかわればよかったのか。Jさん自身は、どこがポイントだったと思いますか。

**Jさん** 長男夫婦と長女の介護観が違うことが明らかになった時点で、何か手を打つことができたのではないかと考えています。

**奥川** そうですね。どの時点がチャンスだったでしょうか。

**Jさん** 平成14年4月22日に話し合いをもった時がいい機会だったと思います。この時点で、長男夫婦は「できるだけことはする。だけど忙しいので、難しいところはサービスを使いたい」、長女は「介護は家族がするもの」と意見が対立していました。

**奥川** Jさんの目で見ても、現実的だったのはどちらですか？

**Jさん** 長男側です。長男夫婦の日常を考えると、長女が言っていることは非現実的でした。

**発言** 長女自身もお寺の子どもとして育ったわけですし、長男夫婦のふだんの生活ぶりや忙しさはわかっているのではないですか？

**奥川** 大事な点ですね。



**Jさん** お寺で育ったとはいえ、父親の方針で子どもには寺のことは一切させませんでしたので、ハッキリ言って長女は寺の仕事のことは何もわかっていないんです。長男も「父が何もさせなかったのも悪いです」とおっしゃっていました。

**奥川** そういう状況のなかで、援助職者として、誰にどう働きかければいいでしょう。ここは媒介者としての役割を發揮できる場面です。

**Jさん** 長女に長男夫婦の現状を理解してもらえよう、わかりやすく説明をする——。

**奥川** Jさんが説明するのではなくて、長女自身に言ってもらったらどうですか？ そのほうが、より深い気づきを促せると思いませんか。

**Jさん** 長女自身にですか？ どうすればいいのでしょうか。

**奥川** たとえば、「では、今のお母さんを介護するためには、1日のなか、また1週間のなかではどんなことが必要になるでしょう」とか「弟さんご夫婦はお寺の仕事をし、保育園の経営もしていますよね。そのなかで、お嫁さんはどれだけの役割を担っているんでしょうね」といっ

たことを、一つひとつ確認して行って、その答えを紙に書き出せば、現実をより具体的に理解してもらえと思いませんか。

**Jさん** なるほど——。そこまで詰めていく必要があるんですね。

**奥川** もちろん、そこまでする必要のない方も多いです。でも、この方にはそういう方法をとったほうがいいでしょうね。なぜだかわかりますか？

**Jさん** 現実を認識してもらうためには、そこまですることが必要だから、でしょうか。

**奥川** そう。先ほどからのやりとりで見えてきたように、この姉弟は、証券会社の誘いにあっさり乗って遺産を失ったり、救急車もまともに呼べない弟と、親の介護をすと言いながらピアノ教室やパン教室に通いたいと言い、50歳を過ぎてでもペットが死んだといっは実家に帰ったりする姉です。十分に自我が成長しないまま年齢を重ねてきているようです。だから、二人の喧嘩も子どもっばいものになってしまうんです。これは元をただせば、父親の育て方に起因しているものだと思います。家政婦さんに子育てをまかせたり、食事を近所の旅館でとらせたり、実質的に「家庭」がない状態で育てていますので、必要な時期に必要な愛情をもらえなかったり、通過儀礼のようなものも経験できなかったのでしょうか。現実面の処理はすべて父親が担っていましたから、現実感覚が薄いまま大人になってしまった。おそらくこれが、このケースの「問題の中核」です。だからこそ、紙に書き出すといったことを通じて、現実をきちんと



認識してもらうことが大事になるんです。

**Jさん** なるほど——。よくわかりました。母親の介護問題によって、潜在していた家族の問題が一挙に顕在化したのだらうというところまでは何となくわかったのですが、そこまで深くはとらえられませんでした。

**奥川** 情報はとれている。でも、「問題の中核」がつかめない。これは、Jさんに限らず、援助職者が成長する過程で必ず突き当たる壁です。でも、こうやって気になった事例を書き、情報の分析・統合をするトレーニングを積んでいけば、必ず突破することができますよ。

**Jさん** はい、頑張ってみます。

## クライアントにできること

**奥川** ところで、このケースでは、もう1回チャンスがありましたね。

**Jさん** そうなんですか？

**奥川** Jさんは、このケースのキーパーソンは誰だと思っていましたか。

**Jさん** 長男の妻です。彼女が一番状況が見えていますし、力ももっています。

**奥川** そうですね。「姉弟は今仲が悪くても、また仲直りするチャンスはある。でも、自分は他人だから、一度こじれると一生かかわることができなくなる」という言葉などからも、とても賢い方だということがわかりますね。では、長男の妻がキーパーソンとして動きやすくなるためには、どういう援助の方法があったと思いますか。

**Jさん** うーん、長男に頑張ってもらおう——。

**奥川** 長男が頑張ると、またお姉さんとのいごみあいが始まってしまいませんか。

**Jさん** うーん、そうですね。

**奥川** こういう時は、Yさんご本人から言ってもらえるのが一番いいんです。Yさんは、一見弱々しそうですが、その実ハッキリと自分の希望を言っていますし、状況も見えていますよね。

**Jさん** そう言われれば、そうです。「自分の家に戻りたい」と明確におっしゃっていましたし、お嫁さんのことも気にされていました。ただ、子どもたちの前では黙ってしまうんです。

**奥川** 自分の意思を表明するという経験をあまりしてこなかった方でしょうからね。でも、そこを強化するのが援助職者の仕事なんですよ。

**Jさん** 強化、ですか？

**奥川** そうです。たとえば、「あなた自身は、どこで過ごしたいですか？ 長年過ごしたところがいいですよ。誰に面倒をみてもらいたい？ お嬢さんに直接ご自分の希望を言ってみませんか」と働きかけたり、一緒に予行演習をするのも有効でしょう。そして、実際に話をする時には、必ずJさんがYさんの隣に座って、その場を仕切るんです。家族療法をするためには、援助職者は場が仕切れないとダメです。

**Jさん** なるほど。私は逆に、家族のことは家族で決めてもらったほうがよい、と引いてしまっていました。

**奥川** どうですか、課題はとけましたか？

**Jさん** はい。具体的にどうかかわればよかったのかがわからなかったので、今日はとてもスッキリしました。ありがとうございました。